

説教学と修辞学（Ⅰ）

山 口 隆 康

Ⅰ．20 世紀における修辞学（レトリック）の復興

修辞学（レトリック）は、19 世紀に市民権を奪われ学問の世界から追放された。ドイツ・チュービンゲン大学において 1496 年に開設された修辞学の講座は、1829 年に閉鎖されている¹⁾。近代世界において大学からの追放は学問としての死の宣告を意味する。この事情は、ドイツ語圏にとどまらず欧米全体においてもほぼ同様である。紀元前 5 世紀、シチリア島における所有権の訴訟問題に勝利するための〈雄弁術〉として誕生したとされる修辞学は、プラトン、アリストテレス、キケロ、クインティリアヌスらの古代ギリシアの思想家たちによって学的に整備、展開され、〈Rhetorica〉と名付けられて教養学の中枢に位置づけられた。この古代ギリシア以来二千年の長きにわたり尊重されつづけた修辞学は、中世において〈自由学科〉と呼ばれた学芸、いわゆる「七主要学科」の中でも中枢部に位置し、その生命力が枯渇することはないと信じられていた。その〈Rhetorica（修辞学）〉が、19 世紀に学問の世界において完全に死を宣告されたのである。しかし、ひとたび死んでいた修辞学（レトリック）は、20 世紀に「新しい修辞学」として甦ることになる。1930 年代に、修辞学は新しい自己理解のもとに蘇生するのである。その蘇生の経緯をたどるうえで不可欠な「新しいレトリック」研究の成果を示す文献を挙げてみよう。

英語圏において I. A. リチャーズ『レトリックの哲学』（The Philosophy of Rhetoric, Oxford 1936）²⁾ を第一に挙げることは異論のないところであろう。英

語圏，とりわけ北米における研究状況に触れるとすれば，いわゆる「ニュークリティシズム」の担い手が，自分たちを「新修辞学派 New Rhetoricians」と呼んだことを考えると，この運動の担い手となった多くの学者の名を挙げねばならないことになる。その代表としてケネス・バークを挙げることができる。評論集『反対陳述』（1931 年），『文学形式の哲学——象徴的行動の研究』（1941 年），『動機の文法』（1945 年），『動機の修辞学』（1950 年），『宗教の修辞学——ロゴロジーの研究』（1961 年），などの著作は，20 世紀における「新しい修辞学」の一つの立場を表現している³⁾。

ドイツ語圏においても文学研究の領域からの修辞学の再興が，E. R. クルティウス，K. ドックホルンらにおいてこころみられている⁴⁾。E. R. クルティウスの代表的著作『ヨーロッパ文学とラテン中世』の原著発刊は 1948 年（邦訳 1971 年，南大路・岸本・中村訳，みすず書房）であるが，この書物の中心概念を形成している「トポス論」は，論文「歴史的トポス論の概念」として 1938 年に発表されている。

フランス語圏においては，J. ポーラン『タルプの花——文学における恐怖政治』（原著 1945 年，邦訳 1968 年，野村英夫訳，晶文社）に収録されている「レトリックの発見」は 1930 年代の執筆であるとされている。その後 J. ポーランによる研究は，『文彩論』（1953 年）において本格的に展開する事になるが，いずれにせよ同時期（1930 年代）に並行してフランス語圏においても新しいレトリック研究の成果が明らかにされている⁵⁾。

1930 年代に英語圏，ドイツ語圏，フランス語圏において並行的に復活した「20 世紀の修辞学」とでも呼ぶべき新しい視野からのレトリック研究は，1950 年代以降，思想界における言語学，記号論への関心の高揚と発展とも相俟って，その意識を拡大し，みずからの課題領域を次第に明確にしつつ急速に研究を進めていくことになる。1950 年代に入ると，注目すべきレトリック研究が次々と登場する。マックス・ブラックの論文「隠喩」（1954 年）⁶⁾，またマックス・ブラックと共に 1950 年代のアメリカにおいてニュークリティシズムの基盤を形

成した研究者はモンロー・C・ビアズリーであるといわれるが、彼もまた主著『美学』(1958年)の中で、〈隠喩論〉を正面から取り上げ読解の解明を試みている⁷⁾。

ここで1950年代以降のレトリック復興、あるいはレトリック・ルネッサンスとも呼ばれる研究成果の全貌を網羅的にフォローする事は、その内容と研究の広がりから言って困難である⁸⁾。ここでは、拙論の関心である説教学との関わりにおいて、とくに1930年代から50年代におけるレトリック復興期の研究に注目し、20世紀における新しいレトリックの復興の理由と根拠を説教学との関わりで論じていくこととしたい。

*

さて、20世紀における修辞学の復興とその研究成果を一瞥する事により修辞学研究が学問の一領域を再び形成してきたことを指摘しているわけであるが、それらの1930年代以降のレトリック研究は、19世紀における学問的市民権の喪失の必然性をみずから認めながら、新しい自己理解を言語にかかわる諸科学との関わりの中で提示し、新しいレトリック(修辞学)のレーゾン・デートルを確立してきた。この学問的手続きには思想史的必然性があったといえる。それは、とりわけ言語にかかわる諸科学が、20世紀中葉において避けられぬ課題に直面したとき、レトリックは固有な仕方で、それらの課題と取り組むことになったからである。

それでは、ひとたび死を宣告されたレトリックは、どのようにして甦ることができたのであろうか。ここで19世紀までの伝統的古典的レトリックと20世紀における蘇生したレトリックの相違を明確にせねばならない。20世紀のレトリックは、いかなる意味において「新しい」と言い得るのであろうか。

19世紀までの古典的レトリックは、一つの「技術」であり、「道具 Instrument」であった。それは極めて精密に組織化された理論体系であり、同時に規則の体系であった。しかも、長期間にわたり中高等教育の中で「一学科」として制度的に学問的市民権を保証されていたのである。しかし、19世紀までの伝統的レ

トリックとは、そもそも何であったのかという課題は、それほど単純ではない。冒頭に記述したように、古代ギリシアにおいて政治的効用を第一として出発した修辞学は、〈Rhetorica〉と呼ばれ、プラトン、アリストテレス⁹⁾、キケロ、クインティリアヌスと辿ることにより、すでに古代において学問的普遍性を確立した。そして、中世においては「七自由学科」として学芸分野の中に位置づけられ、とりわけ「三自由学科」の中でも修辞学は、文法学、論理学を支配し、不可欠なる教養として確固たる存在であった。このような二千年間つづいた学問であるレトリックとは何であったのか。このような壮大な歴史をもつ伝統的レトリックを「旧レトリック」と限定づけることにより、20世紀のレトリックは自己の新しさを主張するのである。伝統的レトリックがもっていなかった〈新しさ〉とは何であろうか。この〈新しさ〉を自己の固有なる新しさとして語り始めるところに20世紀のレトリックの発言位置があると言える。

ロラン・バルトは『旧レトリック、便覧』(Roland Barthes, *L'ancienne Rhétorique*, Paris, 1970)において、レトリックを「言述(ディスクール)」を対象とし、その仕組みを分析検討する〈メタ・ランゲージ(上位の言語)活動〉と規定する。日本におけるレトリック復興の担い手のひとりである佐藤^{さとうのぶお}信夫は、ジェラルド・ジュネットの言葉「ペダンテスクな規則の硬直した体系」という言葉を引用しながら、古いレトリックを、〈技術体系としてのレトリック〉、〈説得効果としてのレトリック〉、〈修辞表現としてのレトリック〉として三つのポイントから整理している。あるいは1943年生まれのレトリック研究者佐々木^{ささきけんいち}健一が、「レトリックの蘇生」という文章を「レトリックは実践であるとともに、認識あるいは学問である。レトリックを駆使して文章を綴る作家がおり、その技法に関する分析的学問としての修辞学がある」¹⁰⁾と書き始める時、19世紀までのレトリックの本質を技術の体系としてとらえると同時に、その技術を分類、分析、検討する学問としてとらえている。ロラン・バルトは、このような「古典的レトリック」と名づけられる伝統的レトリックの本質と実態を次のような一つの譬えによって説明する。

「修辞《機械》では、生れた時の失語症的状态からやっと抜け出て、最初に入れるのは、推論という名の素材であり、事実であり、《主題》である。最後に出てくるのは、説得するためにすっかり武装した、完全で構造化された弁論である」¹¹⁾。

R.バルトの理解によれば、古典的レトリックは〈言述組立て製造機〉とみなされる。レトリックを〈機械のような形をしたもの〉とみなすと、その実態が何であるか理屈として説明できるというのである。このR.バルトの〈修辞機械〉のモデルを、佐藤信夫はさらに詳細に細分化し、古典的レトリックを〈言述産出装置〉として説明する。そして、R.バルトの理解を継承発展させて次のように結論づける。

「伝統レトリックが本質的に変形産出装置のかたちをした(ほとんどチョムスキー的意味での)説明的理論だった、という特徴は、なぜか見逃されつづけていた。レトリック自身も見逃していた」¹²⁾。

R.バルトが鋭く洞察し、佐藤信夫が的確に説明してくれたのは、古典的レトリックとは〈産出装置のかたちをした説明理論〉にはほかならないということであった。古典的レトリックは、長い間〈産出装置〉と見なされていたのである。伝統的レトリックは、基本的に〈説明理論〉であって〈産出装置〉ではないにもかかわらず、なぜ長い間〈理論〉が〈装置〉と間違われ続けていたのかという問題がここにある。換言すると、説明理論に対して、ただちに言述作成上の実用的効用が期待されるのはなぜか、という問題である。そのような期待と誤解の背後には、言述の生成において、普遍的技法や法則が存在するという理解が隠れて存在していると思われる。そこから言述作成のための規則の体系ということが考えられることになる。そのような誤解の背後には、さらに言語表現に関する普遍主義という誤解が前提にされていることが推測できる。すぐれた言語表現というものが普遍的に存在する。そこから普遍的技術や法則を抽出し、体系化する、という考えが生まれるわけである。このように考えてくると、ここでもう一度古典的レトリックの没落の歴史を思い出さざるをえない。古典的レトリックが、近代以降の学問的世界で信用を失墜したのは、このような普遍

性に依拠した古典的言語観を土台にしていたことも大きな理由のひとつだったからである。

＊

1930年代に蘇生し、1950年代以降本格的に展開する「新しいレトリック」の固有性はどこにあるのであろうか。その固有性の主張こそ研究者ごとに異なるわけであるから、その全貌を詳細に示すことはほとんど不可能である。しかし、それにもかかわらず1930年代から1950年代のレトリック蘇生期に明らかにされたレトリック研究を観察すると、そこに共通した特徴がある。それは〈言語活動のもつ創造性〉、あるいは〈言述活動による新しい意味の産出〉に対する関心である。いずれの研究においても、それは周縁的関心ではなく、研究の中核部分を占めている。佐藤信夫の表現を使うならば〈発見的認識の造形〉ということになるであろうし、佐々木健一の言葉によれば〈創造のレトリック〉ということになる。あるいはP.リクールのように隠喩論は、修辞学ではなく解釈学に属するという表現を取るにしても、R.ヤーコブソン、あるいは「グループμ」のようにレトリック概念を拡大一般化する方向で表現したとしても、要するにその本質において同じ関心を表現しているのである。

古典的レトリックが、古代ギリシアで政治的効用という実用的機能と結びついて誕生して以来、その効用は19世紀に至るまでレトリックの第一の定義として認識され続けてきた。アリストテレスは『詩学』のなかで文学の役割を言語による再現・模写すなわち「ミメシス」として説明したが、イマヌエル・カントが集約的に表現した理解にしたがって、認識とは対象の再現・模写でなく主観が感覚の所与を秩序づけることによって成立するという、近代における「科学的認識」の成立根拠を受け入れた上で、「ミメシス」を自己の存在根拠とすると、文学や修辞学などは、自己のレーゾン・デートルを失うことになる。もし修辞学が科学的認識の表現・伝達のための手段・技術であるならば、修辞学とは高度で複雑な認識を、専門家ではない一般人に理解し易いかにするただのテクニックになってしまうであろう。そうであるならば「言語」にまさる

別の手段・技術が登場すれば修辞学の出番は限りなくゼロに近づいていくことになる。(そして20世紀は、この〈手段・技術〉の革命的变化の時であった。)
「ミメシス」が科学的真理からみれば無価値なものとして破棄される運命であることがはっきりしてきたとき、古典的レトリックはその破棄されるリストの冒頭にあったために19世紀に捨て去られた。「ミメシス」を自己の存在根拠として失ったとき、レトリックは固有な自己の存在意義を明確にせざるを得なくなった。19世紀に「ミメシス」論からの離脱という出来事が起こったために、20世紀になっても自己の存在意義を曖昧にしたまま生き延びていた「他の言語に関わる諸科学」と比較して、レトリックは明確な存在根拠を求めざるをえない運命に追い込まれることにより自己を蘇生させることになったと言えよう。そして、文学もまたレトリックとともに自己の成立根拠を問うことにより、新しい地平を開拓することになった。言語学はもとより倫理学、政治学、宗教学にとどまらず、言語に関わる人文科学全体が、そもそも本来の「ミメシス」とは何か、という地点にまで問題意識を深めて行くことになったといえる。

II. レトリック研究と説教学の接触

それでは「言語に関わる学問」である神学はどうであろうか。とりわけ説教学は、歴史的に見ても修辞学と深く関わりながら、その歩みを進めてきた。説教学は「言語に関わる学問」として、他の学問諸科にまさって修辞学の没落問題を敏感に感じ取り、自己の存在の根底に関わる課題として取り組むことになる、と考えるのが自然であろう。ところが説教学の反応は驚くほど鈍かった。ドイツ語圏における代表的実践神学雑誌 *Pastoral Theologie* 誌上に、マンフレート・ヨズツェイスが論文「説教学とレトリック」を発表したのが、1968年である。書物としては、ゲルト・オットーの『話法としての説教——説教学と修辞学の相互作用』(1976年)、同じ著者の『霊的話法——七つの修辞的プロフィール』(1979年)が、説教学におけるレトリック研究の本格的始動の時期を表現している。その後の研究成果として、ヨルク・ロータームント『聖霊とレトリ

ック』(1984年), M. ヨズッティスの論文集『説教作業におけるレトリックと神学』などがあげられる¹³⁾。

1927年生まれのマインツ大学の実践神学者G. オットーは、彼の説教学研究の中心的課題として〈説教学とレトリック〉を追求し、1987年に『修辞的課題としての説教』を発表、『実践神学概論』(1986年), 『実践神学の問題領域』(1988年)においてもある程度展開している。しかし、レトリック研究を取り入れた説教学としての学問的体系化の試みがまとまりを見せたのは1999年のこと(『修辞的説教論概説』)である¹⁴⁾。

20世紀における説教学の歩みが、なぜ修辞学の没落に対して冷淡であったか。また説教学が、レトリック復興に対して関心を向けつつも絶えず距離を取ることに神経を使うのかという問題は、20世紀の説教学の歩みを歴史的にとらえる上で興味深い課題である。しかし、ここではレトリック研究と説教学の接触の必然性に問題を絞って論考を進めて行くこととしたい。レトリック研究そのものが説教学にとって不可避であるのみならず、説教学の視野を拡大し、学としての説教学の建築に際し、その基礎部分と建築物全体の基本構造にまでかかわる課題を指摘することになることを明らかにする事がここでの眼目である。

*

日本におけるレトリック研究者として^{あまが さきあきら}尼ヶ崎彬は、和歌と歌論に注目しつつ、その研究を進めている。『花鳥の使』(1983年), 『日本のレトリック』(1988年), 『ことばと身体』(1990年), 『縁の美学』(1995年)は20世紀の新しいレトリック研究を踏まえながら、和歌の詩学研究をすすめた成果である。尼ヶ崎彬の藤原定家論にみられるレトリック理解に触れつつ論考を進めてみたい。筆者はかつて拙論「説教における引用の問題」(1992年)において、「説教における引用の問題」と「和歌における本歌取りの技法」の関係について論じ、定家の歌論の関心が「作者の意図」にあるのではなく「享受の仕方」にあったことを尼ヶ崎彬が指摘していることに注目したことがある¹⁵⁾。尼ヶ崎彬のレトリック研究に

において、この観点が保持されていることは重要であろう。尼ヶ崎彬は、和歌と歌論を対象・素材としてレトリック研究を進めて行く中で、藤原定家の歌論を含めて日本におけるほとんどの歌論は、「作者の意図の実現」としての和歌作成方法が「享受の観点」から論じられていることを発見し、和歌論解明のための重要な鍵としている。作者の〈意図の実現〉とは〈産出の方法・技術〉を意味しているであろうし、作品の〈享受〉とは作品の〈分析解釈〉という受容を意味しているであろう。そうであるとすれば藤原定家の歌論『近代秀歌』『詠歌大概』『毎月抄』は、その外形において〈和歌産出装置〉の体裁を取ってはいるがその本質において和歌についての〈説明理論〉であったということになる。藤原定家の歌論の本領とも言うべき「本歌取り」の技法とは、和歌の作成に際し「制詞」（「制の詞」とは「主ある詞」すなわち、ある作者の独創と認められている表現の禁止）という法則を守りながら、誰もが直ちにその和歌全体を記憶の中に復元できる古歌の一部を引用する事によって新しい独自の和歌を創作する方法である。尼ヶ崎彬は、定家の「本歌取り」論の中に、「言葉の意味よりも、言葉が用いられている場面に注目し、言語操作そのものがもつ意味を解釈の対象とする」¹⁶⁾という定家のレトリック論が鮮明に現れていることに注目し、その本質を次のように分析している。

「第一に、古歌の引用が現在の事情（状況なり情念なり）の確認として行われたこと」。この背後には、古歌には永遠の〈型〉が登録されており、「現在」はこの〈型〉の反復・再現であるという思想がある。

第二に、古歌の引用は、古歌の改造であり、「その改変の仕掛けと意図とを読解の対象とさせるような行為が行われたこと。この場合、古歌は操作の材料にすぎない。歌の文意の理解が一次元的読解とすれば、この言語操作が意味するものの解釈（メタ言語的解釈）は二次元的読解である」¹⁷⁾。

藤原定家の「本歌取り」論は、本人が自覚していたか否かを別にすれば、「芸術的表現の技術」論にとどまらず、「発見的認識の造形」（佐藤信夫）という、古典的レトリックが見落とし、20世紀になって改めて鮮明に自覚したレトリックの本質理解と一致する。もっとも〈創造的認識とその認識の造形〉にレトリ

ックの本質を見る見方から解明された〈定家論〉は、20 世紀における新しいレトリック理解から見直された解釈である。その意味では尼ヶ崎彬によって獲得し直された新しいレトリック理解を、日本の修辞学（和歌論）という文脈において発音し直しているとも言えよう。このことを尼ヶ崎彬は『日本のレトリック』（1988 年）において論じているのであるが、この書物に先立つ『花鳥の使——歌の道の詩学』（1983 年）の中で「物狂いへの道」という一章を設け藤原定家論を展開している。そこでは藤原定家と後鳥羽天皇との関係を歴史的経緯をも加味しつつ、定家の歌論と『後鳥羽院口伝』とを対比させながら論じている。この二人の論争とは、『新古今和歌集』の編纂問題を軸に、「和歌の道」「和歌の意義」「歌はいかにあるべきか」「和歌の価値」についての論争であったという。尼ヶ崎が論じる「定家において歌とは何であったのか」という和歌論は、藤原定家を媒介にして論じる 20 世紀のレトリック論である。尼ヶ崎彬は言う。「『歌の道』を知るために必要なのは、歌に関する知識ではない。『さとり』こと、つまり詩的主観を手に入れることである。しかし、詩的主観は、言語化してこれを認識することはできない。なぜなら詩的主観とは、認識主観それ自体である以上、これを手に入れるとは、ある知識を認識内容として知ることではなく、ある認識形式（日常の世界の観方とは異なる、もう一つの観方）を自身で実現することでしかないからだ」。「定家が語らねばならなかった問題は、『ことば』と『こころ』であった」¹⁸⁾。

藤原定家と後鳥羽院との和歌論争のテーマは、明らかに「和歌とは何か」「和歌の評価の基準の問題」「歌人の生き方」の問題である。尼ヶ崎彬は、これらを論じつつ、「レトリックの本質」を論じ、そこから言葉に関わる学問と人間の生き方を根底的に論じていると言える。20 世紀においてレトリックを論じることは、「言葉に関わる人間の営み」を始源・根源から全体的に問い直すことに他ならないのである。

説教学が、死から甦った 20 世紀のレトリック論に触れるとき、レトリック自身が設定した「レトリックとはそもそも何であるのか」という根源的課題と接

触することになる。レトリックはもはや自己の本質を古典的「ミメシス」においておらず、レトリックの普遍性を問題にしておき、「発見あるいは創造的認識の造形」(佐藤信夫)、「レトリックの創造」(佐々木健一)など、その自己表現は様々であるが、要するにレトリックに接触する者に「あなたは何者であるか」という問を真摯に問いかけずにおかないことは確かである。説教学は、ここで「説教学とは何であって、何でないのか」という自己弁明をせねばならないことになる。

Ⅲ. 説教学の自己理解をめぐって

すでに見てきたように、レトリックは、かつて組織的に構成された技術学であり技術システムであった。それは効果的に説得する技術として理解されたり、聴く人の心を捕らえる力を持つ言葉を産出する技法の理論システムであった。そして、19世紀に死んだ。古典的レトリックの死後、死者をむち打つために生き残った誹謗表現がある。「それは、ただのレトリックにすぎない」。もっともこのような誹謗の言葉は、古典的レトリックの誕生以来存在していたとも言えるので、死後に発明された言葉や理解ではない。古典的レトリックは、このような誹謗に対して、19世紀までは教育制度によって自己の存在意義を支えていたが、制度から外された瞬間に学問的死を宣告される悲劇を経験することになったわけである。しかし、レトリックは甦った。新しいレトリックには、古い学問的市民権の復権という関心はなかった。それにもかかわらず、否、それゆえに「言語に関わる諸学科」に大いなる刺激を与えずにはおかなかったのである。

説教学はどうであろうか。「それは、ただの〈お説教〉にすぎない」と言う誹謗以上の「私に〈お説教〉をしないでくれ!」という軽蔑と卑下の言葉にたいしてどのような弁証をなしてきたであろうか。皮肉なことにレトリック学者からも、説教は次のように軽く扱われているのである。

「クインティリアヌスを読むのは楽しい。彼はよい教師で、饒舌ではないし、あまり説教くさくもない。分類癖とともに感受性をそなえた精神の持ち主であ

る。(＊この両面の結合に、世間はいつも驚きのあまり途方にくれるようである)」¹⁹⁾。

説教研究の分野は、20世紀の一人のレトリック学者(R.バルト)から、「クインティリアヌスは、美辞麗句をならべる饒舌癖がなく、説教くさくもない」という表現で皮肉を言われているのである。R.バルトは、レトリックを技巧・技術としてしか見ることができなかった後世の修辞学者と説教者を並べて批判している。彼らは、伝統的レトリックの一面しか捕らえていなかったからであるという。この皮肉交じりの批判に説教はきちんと答えねばならないであろう。

説教は、古典的「ミメシス」に自己理解の本質を置くという誤認とも言うべき自己理解にとどまっていたよいであろうか。かつて古典的レトリックがそうであったように、説教も組織的に構成された説教作成のための技術学であり、技術システムであるという理解にとどまっている必要はないであろう。聴衆の心をとらえる表現の技術、効果的に説得するための技法の理論システムという自己理解は、まさに死を宣告された19世紀修辞学の自己理解だからである。しかも、それは古代ギリシアの修辞学者が自覚していた「言述の分析、吟味」という自己検討機能を忘却し、伝統を無視してやせ細ったレトリック理解である。

伝統的レトリックが本来持っていたがしばらく忘れていたこの側面を、説教は遅まきながら「説教分析」というかたちで回復しようとしている。研究史的には1980年代以降のことである。「ソキエタス・ホミレティカ(国際説教学会)」の発足準備学会となったハイデルベルクでの「説教研究シンポジウム1986」が、説教分析を中心テーマに開催されたのも、この流れの上での出来事である。しかし、享受の観点からの言述の自己検討という伝統的レトリックが持っていた重要な一面を、「説教分析」の開発によって研究視野に入れる歩みを開始したにもかかわらず、説教の学問的成熟は驚くほど遅れをとっていることも認めざるをえない。

ハイデルベルクでの「説教研究シンポジウム 1986」は、その研究報告書『Die Predigtanalyse als Weg zur Predigt (説教への道としての説教分析)』²⁰⁾を 1989 年に刊行している。残念なことに、この報告書の表題は、研究史的に見ると一つの混乱を表現している。それは簡潔な表現を使って指摘するならば、新しいレトリックが、伝統的レトリックを「紀元前 5 世紀から 19 世紀まで西ヨーロッパに君臨したあのメタ言語」と呼んだとき、伝統的レトリックの本質を「メタ言語」としてとらえていたわけであるが、まさに〈このレトリック理解〉が抜け落ちているからである。もし説教分析を「メタ言語活動」としてとらえたならば、説教分析は、説教という言述を対象として、その仕組みを分析、検討するメタ(上位)言語活動としてとらえることができる。説教分析が〈説教への道 Weg zur Predigt〉を問題にするならば、その「メタ性」を放棄せずにその道を探し求めねばならないことになる。20 世紀のレトリックは、自分が分析理論であって産出装置でないことを自覚し直すことにより、疑似言述製造機械という使い物にならなくなった古い衣を脱ぎ捨てることができたのである。この書物『Die Predigtanalyse als Weg zur Predigt (説教への道としての説教分析)』は、それ以前にいくつかの書物を指摘する事ができるにも関わらず、それらの書物に勝って「説教分析」を説教学の学問的研究の舞台に正式に登場させる役割を果たした書物である。しかし、研究の出発点がいつも未分化、混沌という未熟部分を含んでいるように、研究方法論的には決定的ともいえる問題点を表現していることを指摘せざるをえない。

暫定的結び

レトリック研究と接触することにより、説教学の構造的根本問題が、レトリック研究との接点において浮かび上がってきたのである。説教学は、はたして説教産出理論であるのか、それとも説教産出装置であるのか、明確にせねばならない。19 世紀のレトリックのように、産出装置のかたちをした説明理論であるのかという問題を解かねばならない。20 世紀のレトリック研究は、佐藤信夫の表現を使うならば「説得する表現の技術」「芸術的あるいは文学的表現の技術」

という理解にとどまらず、「発見的認識の造形」という表現で新しい自己理解を求めようとしている。しかし、20世紀のレトリック復興が、明確にしてくれたのは問題の到達点でなく出発点である。なぜなら発見的認識にレトリックが関わることと、認識の造形にレトリックが関わることは、それほど単純に結合しないからである。説教学の本領は、まさに古来よりこの点にあった。説教学は、解釈装置であるとともに産出装置として自己の本質をとらえねばならない。産出装置のかたちをした説明理論という疑似製造装置ではなく、説教分析というメタ言語活動をも自己の中に位置づけながら、説教テキストの解釈というかたちでの発見的認識を、説教という言述へと転換する〈転換装置〉の仕組みがここで問題になる。

説教が、ミネルバの梟^{ふくろう}の夕べの業でなく、日毎に新しい言葉を産み出すためには、解釈による発見的認識の造形を可能にする説教文体論が、この〈転換装置〉の心臓部を形成することになる²¹⁾。(やまぐち・たかやす)

注

- 1) Jörg Rothermundt, *Der heilige Geist und die Rhetorik*, Gütersloh, 1984, S.16
- 2) 邦訳『新修辞学原論』石橋幸太郎訳, 南雲堂, 1961年
- 3) ケネス・バーク (Kenneth Burke)
 『反対陳述 Counter-Statement』New York, 1931
 『文学形式の哲学——象徴的行動の研究 The Philosophy of Literary Form: Studies in Symbolic Action』Baton Rouge, 1941
 『動機の文法 A Grammar of Motives』New York, 1945
 『動機の修辞学 A Rhetoric of Motives』New York, 1950
 『宗教の修辞学——ロゴロジーの研究 The Rhetoric of Religion: Studies in Logology』Boston, 1961
- 4) J. Rothermundt, ebd. S.17
- 5) 日本におけるレトリック研究家の一人である佐々木健一は、フランス語圏における1930年代のレトリック復興を証拠づける研究としてP.ヴァレリの研究を挙げている。マラルメの弟子P.ヴァレリは、純粹詩の理論形成の文脈から人間精神の創造性に着目しレトリックの新しい局面に注目した。佐々木は文献とし

でヴァレリの「詩の諸問題」(1935年)を挙げている(P.ヴァレリ『ヴァレリー全集6〈詩について〉』邦訳1978年、筑摩書房)。

佐々木健一「レトリックの蘇生」は論文集『創造のレトリック』に所収、勁草書房、1986年、264頁以下参照

- 6) “Metaphor”, *Proceedings of the Aristotelian Society*, 55.1954, pp.273-294, in: *Models & Metaphor* 1962 (「隠喩」尼ヶ崎彬訳, 論文集『創造のレトリック』所収)
- 7) M. C. ビアズリー「隠喩のひねり」相澤照明訳, 論文集『創造のレトリック』所収を参照
- 8) もし50年代以降の研究について、多少触れようとするならば、おそらくこの分野へのアプローチにおいて誰もがある種の敬意を払いつつ指摘する研究成果は、ローマン・ヤーコブソン『一般言語学』であろう。また、別の意味においてベルギーのリエージュ大学の研究者集団グループ μ による『一般修辞学』は、その立場、評価は別にして20世紀後半のレトリック研究においてもはや無視できぬ位置を占めていることは確実である。またロラン・バルト、ポール・リクールの独特の研究成果は、20世紀におけるレトリック研究の成果であり、彼らとの対話はレトリック研究において欠かすことができないであろう。ここでは「説教学とレトリック」というテーマとの関わりにおいて、ハラルト・ヴァインリヒ(Harald Weinrich)の著作『うその言語学』(*Linguistik der Lüge*, Heidelberg, 1974⁵), 『時制論』(*Tempus*, Stuttgart / Berlin / Köln / Mainz, 1977³), 『言語とテキスト』(*Sprache in Texten*, Stuttgart, 1976)の重要性を指摘しておきたい。
- 9) アリストテレスは「どのような課題に対しても対応できる説得の手段を見つける能力」と定義づけ、政治を志す者にとって修辞学と弁証学は必須能力と位置づけている(『弁論術』I巻第二章)。
- 10) 佐々木健一『創造のレトリック』259頁
- 11) Roland Barthes, *L'ancienne Rhétorique*, Paris, 1970 (『旧修辞学, 便覧』沢崎浩平訳, みすず書房, 1970年, 78頁以下)
- 12) 佐藤信夫『レトリックの消息』白水社, 1987年, 37頁
- 13) 本文中に挙げた文献他

Gert Otto, *Predigt als Rede*, Stuttgart / Berlin / Köln / Mainz, 1976

——, *Von geistlicher Rede*, Gütersloh, 1979

——, *Predigt als rhetorische Aufgabe*, Neukirchener-Vluyn, 1987

Jörg Rothermundt, *Der heilige Geist und die Rhetorik*, Gütersloh, 1984

- Manfred Josuttis, Rhetorik und Theologie in der Predigtarbeit, München, 1985
- K. Adloff, Die Predigtwoche. Ein homiletisches Exerzitium, Göttingen, 1988
- 14) Gert Otto, Grundlegung der praktischen Theologie, München, 1986
- , Handlungsfelder der praktischen Theologie, München, 1988
- , Rhetorische Predigtlehre, Ein Grundriss, Mainz / Leipzig, 1999
- その他, 重要な無視できぬ書物として
- Albrecht Grözinger, Praktische Theologie und Ästhetik, München, 1987
- 15) 「説教における引用の問題」『神学』54号所収, 1992年
- 16) 『日本のレトリック』筑摩書房, 1988年, 190頁
- 17) 『日本のレトリック』191頁
- 18) 『花鳥の使——歌の道の詩学』勁草書房, 1983年, 128頁
- 19) ロラン・バルト『旧修辞学』沢崎浩平訳, みすず書房, 31頁 (ただし*印以下は, 佐藤信夫訳による。『レトリックの消息』35頁参照)
- 20) Hrsg. R. Bohren / Klaus-Peter Jörns, Die Predigtanalyse als Weg zur Predigt, Francke Verlag
- 21) 「説教文体論」については, 「説教における引用の問題」『神学』54号においてある程度展開している。また, 「説教分析」とレトリック研究の問題については, 拙論「説教分析理論の展開 (Ⅱ)」『神学』51号, 1989年において論じている。